

人権コラム6月号

「マンガで学ぶ？」

藪田 直子 (大阪教育大学)

大学で教員をしているので、自分の研究や授業づくりのために本を読んだり、調べたりする時間をたくさん取っています。基本的に文字ばかりの本を読む割合が高いのですが、学びのために「マンガ」を読むこともあります。「マンガで勉強なんてできるの？」と疑う人もいるかもしれませんが、なかなか良いものですよ。

マンガは世代を超えて楽しめるツールですし、作品の舞台となった場所を訪れる楽しみ方もあり、外出へつながることもあります。もはやマンガは単に1人で読むだけのインドアな娯楽にとどまりません。

みなさんは、どんな作品が心に残っていますか？どんな作品を人にすすめたいですか？今回、私がみなさんにおすすめする「学べる」マンガは、『未来のアラブ人』（花伝社、1,800円税別）というフランスのマンガです。

作者はRiad Sattouf（リアド・サトゥフ）。1978年にパリで生まれたリアドには、シリア人の父とフランス人の母がいます。この作品は、リビア、シリア、フランスを行き来しながら暮らしたリアドの経験を描く自伝的作品となっており、既に300万部以上が発行され、翻訳された言語は日本語を含めて23言語というので驚きです。

エッジの効いた社会風刺も混ざりながら、その場のニオイや、おとなたちのクセなど、子どもならではの鋭い目線があります。それぞれの場所の政治、社会、人びとの価値観や文化などがリアルに描かれている点に、私は大いに学びました。

「ほんで？」「どうなったん？」と思わずつぶやいてしまうような展開もあり、スピード感があるというか、いちいち説明や価値判断をしないままストーリーが進んでいく。断片的に、どこか淡々と描かれるのもこの本の特徴です。子どもの視点とはそういうものかもしれませんね。

私のお気に入りにはリアドの母、クレモンティーヌです。ロングヘア—であまり表情のない描かれ方をしています。リアドの父、アブデル・ラザックが大学教員の職を得て、一家はパリからリビアのトリポリに向かいます。夫と一緒にとは言え、幼いリアドを連れて、初めての国に移住するとはどんな心境だったのでしょうか？私なら不安でいっぱいになってしまいそうですが、クレモンティーヌは、アラビア語で書かれた夫の採用通知を見せられて、「？」となっているだけで、それ以上の描写はありません。

当時のリビアは1969年の革命で政権を掌握したカダフィがおさめる独裁政権下にありました。一家は空き家を与えられますが、室内から掛け金をするだけのカギのない家。案内人は、わが指導者（カダフィ）が個人所有を廃止し、どの家も「みんなのもの」になっている、この国は家がない人はいない、失業もない、食糧不足もない、「進んだ」国だと説明します。ある日、一家が散歩から戻ると、玄関の外に荷物がまとめてあります。家には中から掛け金がかかっている……。さあ、リアド一家はどうになってしまうのでしょうか？続きは第一巻で。